

## 第1回口丹地域における府立高校の在り方懇話会（概要）

- 1 日 時 平成28年3月18日（金）午後2時～午後4時30分  
2 場 所 ガレリアかめおか（大広間）  
3 出席者 出席依頼者 24名  
府教育委員会 橋本教育次長、山埜高校教育課長、  
中島高校改革担当課長 ほか

### 4 概 要

- (1) あいさつ  
(2) 説明・報告等  
(3) 意見交換（主な意見）

---

■意見交換（主な意見） ○：出席者 ◆：府教委 ◇：進行  
・：欠席者意見（事前に聴取した意見を進行が紹介）

- 亀岡市内の中学生は、交通の便が良いこともあり、京都市内の公立高校、あるいは私立高校に多くが進学する傾向が続いている。地元の高校にできるだけ多く入学してもらうため、それぞれの学校が特色を打ち出し取組を進めている。現在、府立高校ではいくつかのグループに分かれて取組を行っている。本校には数理科学科があるので、理科系の学科をもっている高校とチームを組んで、お互いの学校間で交流をしたり、あるいは京都大学や京都工芸繊維大学などの理科系の大学と連携し、生徒が特別講義を聴講したり、大学に出向いて交流会等のイベントに参加するなど、理科系をメインテーマにして色々な取組を行っている。
- 本校には、口丹地域の様々な地域から進学してきている。本校は1学年8学級あり、部活動の数も多いため、この部活動がしたいとか、大学進学を目指してしっかり勉強したいとか、様々なニーズに応えられるだけの規模があるので、色々な地域からたくさんの方が来てくれていると考えている。口丹地域全体として、北の方から南の方に子どもが移動しているという傾向は、なかなかすぐには止められないのではないかと。
- 須知高校や北桑田高校については、この間定員が削減されているが、それを上回るスピードで子どもの数が減っており、ここ数年にわたって定員が割れている。90人又は100人という定員に対してそれを充足できない実態が生じてきている。
- 本校は、府内で唯一の農業の専門高校であり、農業という産業と非常に密接に結びついた高校である。そういう意味では、存在自体が特色だが、更なる特色化に向けて、より一層取り組んでいる。生徒募集については京都府全域から志願が可能であるが、現実には、例年約半数が亀岡市等から入学している。また、本校には寮があり、特に1年生の男子は全寮制であるので、まず寮教育を初期教育として行っているのが特徴である。
- 入学志願者について、この2～3年は定員を充足していたが、今期については若干定員を割っている。そういう意味では、本校のアピールが足りないというところがあるかとも思う。卒業後に農業に就く生徒はほとんどおらず、他の産業に関する職に就いていくことになる。本当に農業を目指している生徒に、筋道をつけた教育をこれから進めていくべきだと思っている。そういう意味では、教育委員会だけではなく、

府の農林水産部等の行政、農業関係の諸機関と連携を深め、農業の人材育成をどのように図るのかということを確認にし、人材育成における農業高校の在り方を明確にして教育を進めていくことが今後の課題である。

◇ 中学生の進路状況について、お話をうかがいたい。

○ 京都市内の高校へ進学する傾向は、ここ数年前、特にJR嵯峨野線が複線電化になってから今の状況が続いている。しかし、亀岡市内の子どもたちの中には、地元の亀岡高校や南丹高校に進学したいという希望を持つ生徒も多くおり、半数以上の子どもたちが受検している。その中で、当初の希望を変更し、約30%が私立へ、残りが公立・国立、定時制へ進学するというのが現状である。本年度はまだ集計をしていないが、昨年度の選抜では、全日制の口丹通学圏の公立高校には50%以上の生徒が進学している。特に、入試制度改革に伴い前期選抜を受検して早く進路を決めたいという子どもが多くいる状況である。

○ 本校は須知高校の校区にあり、京丹波町の状況が色濃く出ている。昨年度の選抜の状況は、本校1クラス40名程度の卒業生について、須知高校の普通科へ進学した生徒が25%、食品科学科へ進学した生徒が13%と、合わせて4割ほどが須知高校へ入学している。残りはほとんどが他の公立高校へ進学するわけだが、南の地域への進路希望があり、10名程度の生徒が園部高校へ通っている。また、工業高校など、積極的な目標を持って、特定の高校へ進む生徒もいる。

○ 地元の高校に対する生徒自身の認識は、積極的な理由で特定の学校を自分の将来設計を見据えて選んでいる生徒がいる一方、多くの生徒は必ずしも自分の将来設計があるわけではなく、広い意味で自分の将来に向けて高校を選んでいくというように、周囲の流れの中で高校を選んでいる状況がある。須知高校は、地域の高校として非常に大きな役割を持っており、そういった生徒に対しては、自分の将来像、あるいは職業像など、キャリア意識を育てていくことが、中学校段階で必要ではないか。生徒が南方へ流れていく現在の傾向がある中で、より積極的な進路指導を行い、子どもたちの進路そのものを開拓していく、そういった取組が必要ではないか。

◇ 併せて、事前に中学校の現状についていただいたご意見を紹介する。

・ 本校は卒業生が今年度37名、そのうち北桑田高校への進学者が24名、私学9名、その他の公立高校4名という進学状況である。本校校区の生徒数の減少から考えると、この地域だけで北桑田高校を支えていくというのが非常に困難な状況になってきている。その中で、もう少し通学区域を広げ、京都市内の他地域からも生徒が通学できるようにするといった工夫が必要ではないか。また、高校との関わりでいうと、地域の方々には、地域にある公立高校に通うという意識をかなり持っておられたが、近年その意識がやや変わりつつある。

○ 口丹ブロックの中でも北桑田高校は独特な環境にあると思っている。合併により、美山町は南丹市に、京北町は京都市になった。京都市、南丹市、京都府が三つ巴になっているようなところである。美山町、京北町は旧北桑田郡として一体化していた地域だったが、中学校での様々な行事等は、京都市と南丹市に分かれたことにより、一緒にやることは少なくなった。美山中学校からは、北桑田高校へ進学するのがこれまでの流れだが、南丹市に合併したことや昔よりも受検できる学校の範囲が広がったため、そういう流れに沿って高校を選びはじめ、今までとは違う高校に進学するようになった。今年度は北桑田高校への進学者数は少し増えたが、それでも5割を超えるこ

とはなくなってきた。しかし、美山町内、端から端まで概ね1時間かかる地域において、どうやって園部高校など北桑田高校以外の高校へ通うのかという問題がある。

- 口丹全体の人口が少なくなってきたが、特に旧北桑田郡内の人口減少は加速度的に進行している。その中で北桑田高校をどうしていくのが一番良いか。その場所から無くなった場合の弊害は大変大きい。行政区がバラバラになり、一体的に方向性を見出しにくくなっている。昔であれば、北桑田郡全体として、美山町、京北町が一緒になって、なんとかしようと考えることができたが、現在は京北町が京都市になり、南丹市の人間に京都市のことは分からず、どうも話がうまく進まない。それなら京都府が全体で見てくれるのかということ、それもまた難しいが、何か糸口があればと思う。
- 現状に対する認識は、口丹地域のどの地域の中学・高校も、本日出席の方々が住んでおられる地域そのものも、おそらくそれほど大きな違いはなく、ほぼ共通した認識を持っておられると感じている。しかし、北桑田の現状は非常に厳しい。北桑田がどう特別なのか事例を挙げると、他の地域にあるような、例えば、大きな病院が、高校が、行政区の建物がどれも1つしかない。1つであるがゆえに大切にしたい。私たち保護者の立場からすると、卒業生でもあるし、唯一の高校をもっと大切にしたい、もっと理解をしたい、地域にとって非常に不可欠なものであるという認識を共有したいと思っている。
- 亀岡市内も子どもが減少しており、学校規模の適正化や統合に向けた会議が昨年あたりから行われている。高校だけではなく、小・中学校もだんだん押し迫った状況になっており、実際に複式学級の小学校もある。私には中学生の子がおり、先日受検したところである。昨年、子どもと一緒に京都市内の私立及び市立の高校のオープンスクールに参加し、学習、部活動、大学受験等への取組について色々と説明を受け、子どもも親も、市内の高校にかなり気持ちが傾いた。しかし、最終的には亀岡市内の高校に入学することになった。私には小学生の子もいるため、できれば地元の高校に入ってくれた方が親としては経済的に助かる。地元の高校が今よりもさらに魅力ある高校になって欲しいと思う。
- 先ほどの報告の中で、定員充足率の厳しい学校の1つとして、須知高校が取り上げられた。地元の京丹波町としては唯一の府立高校である須知高校の安定的な存続に向け、町を挙げて全力で支援をする覚悟を決めているので、そのことも踏まえて府教育委員会にはご検討いただきたい。京丹波町では、昨年、町長の諮問機関として「須知高校の在り方懇話会」を設置し、京丹波町にとっての須知高校の在り方、あるいは須知高校を安定的に存続させるために町としてどんな支援が可能かなどを議論してきた。
- 須知高校の定員充足が厳しい理由は2つあると考えている。1つ目は地域の急激な少子化である。今年度の中学校の卒業生数は119名であるが、須知高校の定員が20名減って100名のため、ほとんどの生徒が行かないと定員を充足しないという大変厳しい状況である。2つ目は、厳しい言い方かもしれないが、地元の高校が中学3年生のニーズに応える学校、学科になっているかということである。本町の中学3年生の須知高校への進学率をみると、今の高校1年生では約37%である。その後、須知高校でも普通科や、専門学科の改革が積み重ねられ、今年の進学率は47%まで回復している。これは、地元の生徒にとって魅力ある高校になれば、生徒が来てくれるということを示すものと思っている。

- 須知高校を地元としてどう捉えるかについて、町の懇話会の中で、3つの視点から分析をいただいた。1つ目は、やはり町を支える人材育成の場であるという視点である。この京丹波町の中学3年生の高校教育について、修学を保障する点でいえば、地域的なエリアの広さ、交通機関の問題、あるいは経済的負担の問題から考えれば、地元の須知高校へ行くのが子どもにとっても保護者にとってもそれが最も良い。そのためには、普通科が、地域の生徒にとって魅力のある、進学に係るニーズに応える必要がある。この間、高校でもSAコースをつくれ、進学実績が上がると、地域の評価も高まり、より学力上位層が入学しつつある。

2つ目は、専門学科の魅力化である。今の食品科学科が時代のニーズに本当にマッチしているのかという点では、今少し検討すべきものがある。地元としては、「食の郷、京丹波」を標榜しており、地域の産品を使った加工品等に学科としても随分努力いただいているが、十分な魅力には欠ける。例えば三重県の相可高校のように、地元のロケーションを活かす食品加工に加え、調理師免許が取れるような食品・調理の総合的な専門学科に拡充させることは、和食の京都という点からも、府内全域を対象に、より多くの生徒を呼び込めるのではないかという意見をいただいた。

3つ目は、通学の問題である。定員未充足の学校を議論するに当たり、交通アクセスの問題を抜きにはできない。JRだけで行ける高校と、そこからさらにバスに乗って行かなければならない高校がある。須知高校で言えば、園部駅から京都駅まで行くJRの運賃より、園部駅から須知高校へ行くバス代の方が高い。これは保護者にとって非常に厳しい負担であり、今後の検討に当たっては、定員を割っている原因が、本当にニーズがないからか、アクセスの問題なのかなど、様々な視点から検討していただきたい。地域の生徒の修学保障の点から交通アクセスの支援であったり、場合によっては寮の設置等も含め、是非ともご検討いただきたい。
- 府教育委員会が、急速に進む少子化の進行という時代的な背景を踏まえ、少子化であっても子どもの豊かな学びを支え、時代のニーズにも応える高校改革を推進しようとする意義は極めて大きい。昨年8月、府立高校の在り方検討会議を受け、地域毎に議論、意見交換の場を持たれて、地域の事情やニーズに応じた検討をされるということを知り、大変ありがたく思っている。
- 南丹市には府立高校2校、分校を入れると3校、丹波支援学校を入れると府立学校が4校設置されており、本市にとって、府立高校、府立学校は欠かせない存在になっている。加えて、市内の中学3年生にとって、希望進路の実現を図る上で、これまでも、これからも、進路先として大きな存在である。
- 定員が割れる背景は、私も色々な要因があると思う。一つは少子化が直撃していることもあるが、この口丹地域の高等学校がより魅力あるものになり、生徒の希望進路の対象となり得る高校教育を提供されることが大切ではないかと考える。また、口丹地域の北部は極めて交通アクセスが厳しい状況にあり、その交通事情のため、行きたくても行けないということもある。生徒にとって通いやすい高校であるということも大切な要素の一つではないかと思う。
- 先ほど、地元中学校や高等学校のPTAの方から熱いお言葉をいただいた。地域には、やはり高校はなくてはならないという強い思いを真摯に受け止め、行政として考えていかなければいけないということを改めて感じた。京都市教育委員会としても、京都府や南丹市ときっちり連携してやっていきたいと考えている。京北町の小・中学校は、北桑田高校と連携した取組を進めている。森林リサーチ科や吹奏楽部と一緒に活動させていただいているが、更に連携を深める必要がある。

- 先日の京都市議会の常任委員会でも小中高、一貫した教育でやるべきだというご意見をいただいた。府議会でもそういうお話があったと聞いている。要は、小中高が一体となって、就学前も含めて、そうした学びの場が協力し合い、その地域の子どもを徹底的に育てていける連続した学びをつくっていくということが一番重要かと思っている。そういう取組を通して、高校がより魅力を持つことで、自然と生徒が増え、それがまた地域貢献につながるようになるだろうと思っている。
- これまで京北地域の活性化のことを考え、行動してきたが、まさに、地域の活性化を考えるということは、京北地域においては北桑田高校の活性化を考えるということと近いものなのだろうと考えている。
- 去年の8月に、京北地域の活性化のビジョンを策定した。このビジョンでは、京北地域の少子化、人口減少は、高齢化を含めて非常に危機的な状況であり、自分たちにとって大切な京北を守るためには、新たな移住、定住にしっかり取り組んでいくべきではないかという議論になり、年間30世帯の移住、定住をしっかりと目標として掲げて努力していくことになった。毎年30組の移住、定住にしっかり取り組むと、50年後には、今の5,100人に近づくという試算である。こういう厳しい現実を住民の方々とともに共有しながら、京北地域にとって大事な北桑田高校を支えていくんだという住民意識をもっと持ってもらえるよう取り組んでいけたらと考えている。
- 京北地域には3つの小学校があり、それを1つにする。それと中学校での一貫教育にしっかり取り組みたいと思っているが、さらに、小中高一貫というぐらいの気持ちで、府市協調でやっていけたらと考えている。交通の事情を考えると、北桑田高校は、JR線沿いの高校と違い、駅と非常に離れているためより厳しい状況にある。したがって、具体的には、北桑田高校独自の部会でしっかり議論をしていく必要がある。森林リサーチ科は、全国的にもまれな学科である。ここをしっかりと核としながら、どうあるべきなのかという議論が必要だと思う。寮や下宿については、今ある空き家を有効活用すること等も含め、総合的な京北地域の活性化の中で捉えていく必要がある。
- ◇ 魅力ある高校に向けて、様々なご意見をいただいたが、この地域の産業と高校との関係において、高校の担い手育成という役割の観点からご意見をいただきたい。
- 私ども事業者の立場で出席させていただいた。地元の企業としては、管内に農業に関係する高校が存続するということが、地域の農業の活性化という観点から非常に大事である。農業においても年々少子高齢化の波は押し寄せており、京都府内の耕作放棄地の面積が、亀岡市の農地面積に匹敵するおよそ3,200ヘクタールに及び、農地が農地でなくなる状況にある。  
一方で、新規就農の方も非常に増えており、またIターンで地域農業を支え、地域の文化や村の行事を守るという観点で、地域農業活性化にも寄与している。今後農業は、現状とは大きく変わり、法人経営、いわゆる大型化するという実態もある。その中で後継者となる方が非常に乏しい状況である。
- 幼い頃から農業に親しむ機会が非常に少ないため、農業協同組合として、食の教育活動を、各小学校を中心に行うなど、地域とのふれあいを強めているわけだが、なかなか効果が上がらない。高校時代に職業科でしっかりと農業の良さ、地域の良さを学び、ぜひとも地域の産業である農業が栄えるような教育をしていただけたら非常にありがたい。食は世界に向けた和食の内容でもあり、京都の農業には非常に素晴らしいものがある。この京都の良さを発信するために、農業に関係した高校を是非とも活気ある魅力あるものにしていただき、我々にも力を貸していただけたら非常にありがたい。

◇ 関連したご意見を事前にいただいているので、ご紹介させていただく。

- ・ 京都府内の林業の現状としては、非常に外材依存が高まっている中で国産材価格の低迷が続き、現在は林業経営としては採算性確保が難しくなっている状況にある。ただ、現在森林の機能については、水源の確保であったり、土砂流出防止など公益評価額というのは京都府では毎年9,500億円と試算をされており、その森林の価値は非常に高い。また木材需要についても木材利用促進に関する法整備や木質バイオマス発電への支援策などがあり、自給率が30%近くまで改善し、目標値の50%に近づきつつある状況である。そうした中での担い手の必要性についてであるが、森林作業については労働条件があまり良くない状況にはある。適正な森林整備計画によって再生産可能な状況に改善する余地がある中で、担い手の確保については、市町村における専門的技術者の確保と併せて高校段階における人材の育成ということも必要不可欠であり、ぜひ取り組んでいただきたい。併せて府立林業大学校などの専門的技能者育成との連携についても検討していただきたい。
- ・ やはり魅力ある高校教育をつくっていくためには、政治、地方行政、産業界の本気度が必須である。人が集まるビジネスを立ち上げるという観点を持って考えていかなければならない。学校教育の中だけで検討するのではなくて、関係機関がそれぞれ知恵を出し合って検討していく必要があるのではないか。  
高校教育に関しては、高校は義務教育ではないので、本人のやりたいことができる場であると、その中で柔軟性を持った高校教育を展開してもらいたい。

◇ より魅力ある高校教育に向け、具体的に府立高校の今あるものをどう活かしていくか、あるいは、新たな要素をどう考えていくべきか、そういった観点でご意見をいただきたい。

- 亀岡高校は、現在1学年8学級である。普通科は6学級あり、高校生の大学への進学希望は非常に多様化している。例えば、地歴科は日本史、世界史、地理を、理科は物理、化学、生物、地学の選択授業を行っている。これが1学年で2、3学級しかないと、教科によっては選択者数が極端に少なくなるなど、選択肢として設定することが困難になることが想定される。高校では多様なニーズを受け入れ、学力的な差も大きい。理科系の中だけでも、「こんな科目を勉強したい」等の生徒のニーズを広げていくと、8学級であれば応えられるが、規模が小さくなればなるほど応えられなくなってくる。おのずとニーズに応えられない学校ではなく、一定の規模のある学校に行きたくなる。そこに超えられない壁がある。
- 規模の問題というのはどこかで議論をしていかないと、普通科が1学級となると、文系・理系はどうか、科目の選択等は全く実現できなくなる。本当に高校が、魅力ある高校になり得るのかどうかである。その点は、ぜひ皆さんにご意見をいただきたい。亀岡高校は幸いに一定規模があるので、今言ったようなことが実現できているが、規模の小さい学校は色々と苦労されているのではないか。
- 小規模の学校が多様な生徒のニーズにどう応えていくのだが、どうしてもクラス数が少なくなってくると、教員数が減る。理科の物理・化学・生物・地学の4分野で、本校では地学を開講できていない。物理の教員は非常勤講師である。  
一方で、京丹波町の中学生が色々なニーズを持って本校に来る。就職希望の生徒も当然いる。本校では、普通科でも全体の3割が就職希望、3割が短大、専門学校。残りの3割が四年制大学希望である。学力の幅も広く、学力の高い生徒はセンター試験を受けて国公立大学にチャレンジする。中学校の学び直しが必要な生徒もいる。そう

いう生徒をどのようにして全日制の高校の生活を馴染ませていくか、1年生の間にも  
の凄くエネルギーがいる。入試の時に志願倍率が1.0倍を超えないので、全ての中学  
生を原則受け入れると、結局、高校1年生の間、1年間かけて入学選抜するような現  
状が起こり得る。高校であるから、当然原級留置もある。既定の出席時間数が足りな  
いと、単位が修得できないということもある。

- 多様な生徒を引き受ける地元の府立高校の責務として、教員には、「先生方の頑張  
りが生徒たちの頑張りに繋がり、その姿を地域に見せることで、京丹波町の積極的な  
支援を得られているので、頑張りましょう。」と言っている。しかし、人的、物的な  
限界は否めない。須知高校の場合は、京丹波町にある府立高校であるので、発達段階  
の小さい時、小学校、あるいは幼稚園から我々が関わることで、幼小中高一体となっ  
た地域の教育機関としての役割を果し、京丹波町全体の教育を支えていくことが、本  
校の役割の一つであろう。

状況は厳しいが、地元の中学校の先生方にも支えていただき、一体感のある地域だ  
からこそ、今の状況が保てていると思う。府教育委員会から人的な面での配慮もある  
が、もう一方では、小規模だからできる生徒密着型の指導もきちんとできる側面もあ  
る。地域の保護者の皆さんにも支えられている印象を強く持っている。

- 本校には総合学科がある。この学科は京都府内で府立2校、私立4校、全国的には  
350校余りに設置されている。総合学科には様々なタイプがあり、工業科と農業科を  
一緒にしたり、商業・農業と一緒にしたり、新しいタイプの学校として一時注目を浴  
びたところである。平成6年に始まり、現在20年ほど経つが、現在は、学校へのアク  
セスの問題が全国の校長会での話題になっている。アクセスの良いところに設置され  
た学校は生徒が集まってきやすいが、アクセスの良くない学校は生徒募集が上手い  
っていない。

- 本校の総合学科では、少人数講座等について一定配慮いただいているが、他府県の  
動向を聞くと、生徒が高校に入学する段階に一家転住をされるケースがあり、特に、  
震災があった東北では目立っているとのことである。小学校段階では、少人数教育を  
してもらえるとということで一旦は転居してくるが、高等学校段階で転出するケースが  
多いようである。

- 学校をどのように考えるかは、地域ぐるみで総合的な観点で見ていく必要がある。  
本校は、地域との連携の中でテクニカル工学系列を発足させた。地域の行事について  
は、とにかく生徒を参加させようと学校では話をしている。多くの学校がそのような  
思いを持って取り組んでいるケースは多いが、そうした姿も学校の一つの在り方とし  
て、今後示していかなければならないと思う。

- 本校は、口丹地域唯一の私立高校で、小規模な学校である。公立高校と連携を取り  
合い関係を深めている。私学としては、口丹地域の子どもたちが教育を幅広く選択で  
きる場が必要であり、今後も、公立私学が共存できる体制を進めたい。

今、直面していることは、この地域においてどれだけ特色を出せるか、生徒に魅力  
ある教育をどれだけ打ち出せるかだ。本校の場合、看護科、福祉科、普通科があるが、  
福祉科に生徒が来ない状況があり、募集を停止予定である。本当に良い教育を行って  
いるのだが、地域から来てもらえないのが非常に悩みであった。看護科で定員を増や  
し、今年から募集している。看護科は非常に魅力あるコースであり、京都市内ある  
いは乙訓地域、滋賀県、高槻市辺りからも生徒が来る。しかし、普通科は非常に厳しく、  
他の高校との差別化が難しい面がある。小規模校だが、生徒が勉強したいという希望  
に応じて非常勤講師を駆使し、コースを分けて魅力ある普通科に近づけようと努力を

している。それでも、なかなか来てもらえないのが現実だ。

- 5年後を見ると、地域で160名ほど中学3年生が減少する。1クラス30人学級とすると、約5クラスほどが必要なくなってくる。それぞれの立場で特色を尊重しながら、統廃合も含め、適正配置、適正規模となるよう進めていただきたい。今後もいろいろな地域から必要な高校であるということはよく分かるが、さらに5年、10年後になると、もっと生徒数が減ることになるため、どうしていきべきか本当に私どもも真剣に悩んでいる。
- 配付資料を見ると、平成27年から35年の間に16%の中学3年生の人数が減る。実数では216人とある。これは中規模な高等学校1校分に相当する大変深刻な減少だ。日本中が人口減少ということで、地方行政機関も、企業も、財政や経営の維持という観点が非常に重視される。事業規模の縮小が不可欠だ。高校も例外ではない。
- 府民の生活を支えるには、産業力の向上しかないと思う。高校生は社会に出る一手前で、京都府の産業力、地域振興の元になる。高校生活で、彼らがどれくらい伸びたかということを重要視するべきだ。国も産業界のニーズに応じた人材育成の推進をしようと、首相官邸が国策として社会人基礎力を重視している。社会人基礎力とは、チームで働く、努力する力、前に一步踏み出す力である。会社や事業所で有益な仕事ができる人材は本当に少ないが、その人材が、1%でも2%でも増えることが、会社や事業所の利益を生み、その地域の利益につながり、地域を支え振興する。それを考えると、高校過程での教育というものに、一定の、学年あたりの生徒数規模というものが実は不可欠だということにつながってくる。
- 人は、何かをしたいという意欲がある。多人数で構成される集団に属し、自分の身近に意識できる良きライバルがいて、真剣に頑張るのが伸びる仕組みだ。自分は小・中学校の学年40人の中では1番だったが、高校に行くと5、6クラスあって自分と同じくらいできる人が多くおり、そこで広い世界を知ってまた頑張る。部活動でも地域で優勝するためにチームが高い目標を持って頑張る。摩擦もあるいろいろな問題は生じるが、その中で人間力が育成される。そして、その人材がその地域や産業等で貢献してくれる。
- 学年あたりの生徒数規模で、何人が適正かは色々な見解があるが、160名4学級程度であると考え。口丹地域は広く、地域毎に特別な事情もある。普通科を中心とした各地域の拠点となる高校では一定の規模が必要だ。一方で、特別な事情や専門学科については、少人数であっても充実する方向で進めていくべきだ。それが口丹地域の地域振興力につながっていく。
- ◇ 地域を支える人材づくりという観点でご意見をいただいた。口丹地域で求められる人材、高校の役割という観点ではどうか。
- 口丹地域は非常に面積が広く、アクセスが悪い。その一方で、産業教育は充実している。地元関係者のニーズに沿った形で南丹高校に工業系のテクニカル工学系列ができた。農業分野では農芸高校、そして、須知高校の食品科学科もある。北桑田高校には森林リサーチ科があり、産業分野に応じた学校が一定ある。  
少子高齢化の中、高校生にとって、特色ある、魅力ある高校づくりを進める上では、地元関係者と連携し、次の時代のステップに向けて、思い切ったことをやってほしい。少子化のピンチの時代を一つのチャンスと捉えて、思い切って産業界なり、地元の子どものニーズに合う形で進めてほしい。

- ◇ 幼小中高一体となってというご意見もいただいている。小学校から見て魅力ある高校、高校の在り方について何か考えはあるか。
- 地域の中で暮らす多くの人たちは、近くの高校のOBであることが多い。母校を大事にしたいという気持ちは誰しもが一緒だ。私もこの地域の府立高校の卒業生であり、この時期になると、母校の志願倍率や志願者数が気になる。  
小学校では、キャリア教育の体験活動の一環として、府立高校と連携した多くの事業に取り組んでいる。子どもたちがどのように将来の夢や希望を抱いていくかという点では、身近なところで先輩の生き方のモデルがあるかどうかが大きく、キャリア意識を育てていくことに繋がっている。
- 高校選択については、将来の進路についてどう考えるのかということだ。この高校ではどんなことが学べるのか、将来どんな職業に就くことができるのか、どんな大学でどんな学びが可能なのか、これらが子どもたちにどれだけ見えているのか。その視点で考えると、子どもの思いや夢、どんな学びをしたいのかという将来像は、色んな体験活動や高校見学などで満たされていく部分がある。一方で、保護者の意識や思いはどうか。
- 以前に関わった子どもに関して、その後の話を聞く機会があったのだが、その子には行きたい高校があり、スポーツで頑張りたいが場所が少し遠いのでお金がたくさんかかる。だが、その子の父親は自分の車を売ってでもその高校に入れたい、と話をされていたとのことであった。子どもの将来の夢や希望に対し、それだけのことをしてでもその高校に行かせたい、という思いを持たれたとはすごいことだ。保護者が子どもの思いや願いとつながって、どういう風に子どもの将来を考えていくのかということが大事だ。
- 将来の夢を叶えるという意味も含め、小学校のときから色々チャレンジをしたり、やりたいことに頑張れる前向きな意欲を育てていくことが小学校の責任であると実感している。
- 地元の高等学校の取組は素晴らしく、小学校は、小高連携の取組を通して多くのことを高等学校から学んでいる。小学校卒業段階で将来に向けた職業観を持たせることは非常に大事だ。この取組は、将来の公立高校への志願者数増にきっと繋がっていく。
- 地元の方も、地元の高等学校に入学させたいという願いを持っている。交通のアクセスが非常に大きな要因になっており、須知高校より亀岡高校や園部高校に行く方がいいという実情もあることは確かだ。
- 京北は京都市に編入合併し11年目を迎えた。6年前に京北に着任し、北桑田高校と連携してきた。京都市では5年生が長期宿泊体験学習を実施し、3泊4日「あうる京北」に泊まり、京北の良さを知ろうという試みをしている。その中で、小高連携で北桑田高校の家庭科室を借り、地域の方や高校生と一緒に京北の食材を使っての実習をする。山菜の天ぷら、朴葉ごはん等を作り、子どもたちが高校生と和気あいあいとした時間を過ごす中で、高校生に対して親近感を持つ。近所の方や兄弟が通っているのか、父母、祖父母が卒業した学校ということで、自分も北桑田高校に行くことになるものと感じている。これは当たり前前の姿ではないか。

- 急激な少子化によって、美山・京北の子どもが全員進学したとしても定員割れになったり、クラス数が確保できない状況がある。やはり学校の努力だけでは難しい部分がある。どのように人を呼ぶ努力をするか、森林リサーチ科や全国レベルの自転車部など、人を呼ぶための魅力はたくさんある。ただ、学校が努力するから来てください、というだけではいけない。寮にしても、今どきの高校生は家で自分の部屋を持っていたりするので、昔のような下宿とか、寮では呼び込みにくい。今の高校生に合った寮の建設であるとか、校区の中でも細野地域等からの通学はバス代が多くかかるため、市内に出ようというニーズも踏まえて交通費を補助するなどといったハード面の支援も考えられる。配付資料の19・20ページを見ると、地域を挙げて全国から生徒を呼び込む学校では色々な補助がある。自治体も教育委員会も財政難だということは察するが、何らかの金銭面での負担軽減措置も大事になってくる。
- 中学3年生全員に進路希望面談を行っている。将来、こんな理系・文系の大学に行き、こんな職業に就きたいと言う子どもたちもいる一方、まず、地元の高校に行き、勉強しながら部活をして、高校を卒業して大学で考えるのだという子どもが大半だ。  
将来この職業に就くためと考え、九州や北海道へ行く子どももいる。子どもたちの進路選択は幅広い。その中でも学校説明会等に行き、魅力をどこに見つけてくるか。そこに子どもたちの高校進学希望が出てくると思っている。
- 今年、美山分校を特別支援学級の子が受検した。分校では丁寧な指導と支援をしていただき、子どもたちが卒業していくことを保護者も知っている。しかし、交通費、通学時間で負担が大きい。今年受検し合格した子どもも、通い続けられるのかと心配である。特別支援学級に在籍している子どもや保護者も高等学校への進学希望が多くなってきている。もっと近くでそのような学校があってほしい、という思いは現場としても保護者としてもある。
- 本校40名のうち15名ぐらいが須知高校に通っている。一昨年、須知高校から難関の神戸大学・広島大学や防衛大学校など4校ほどに合格した。地域の子どもが須知高校進学を経て実績を残したことに對し、地域の方々が誇りに思っていることは嬉しいことだ。10%ほど須知高校への進学率が回復したという話があったが、須知高校に対するイメージの変化が徐々に現れているのではないか。子ども密着型で続けている改革の成果が出ている。
- もう一つ、地域の深刻な状況として船井郡・北桑田で共通すると思うが、交通の便が悪いことである。本校98人の子どもは、5台のバスを使って通学をしている。和知中学校は60人ほどだが、5コースのバスを使って通学している。本校で支援家庭の子が2割、蒲生野中学校は2割5分ほどである。美山分校に美山から2人、あとの8割は南丹市や亀岡市から通っている。地域の中で様々な状況にある子どもたちが、地域にある学校だからこそ、地域の分校が大切にしてくれているからこそ、そこに通えている。厳しい条件があっても通えるという側面があって、いかに各コースを磨いて、子どもにとって魅力的な高校とするのかという議論と、そういう条件の中にある子どもたちに豊かな高校生活を保障するという、地域の存続にも関わる問題でもあり、学習保障の問題も含め、魅力づくりと保障の両面から議論を組み立てていく必要がある。
- 本校は特別支援学校として、地域の障害のある子どもたちを支援し、それぞれの幼小中高校のセンター的機能を担っている。  
ここ3年くらい特別支援学級の子どもの5、6割強ほどが本校以外の学校に進学している。本校のセンター機能として、高等学校からの相談のケースも増えてきている。モデルケースとして、一つの学校と継続的に連携しながら、ケース検討および支援力

を上げてもらう取組をしている。子どもの実態を把握して支援策を考えたり、大学進学に向けての個別の支援計画を作成するなど、大学との連携につなげていきたい。今後、幼から小、小から中、中から高の連携をさらに進めていく必要があり、それに向けて本校も地域にさらに貢献していかなければならない。地域が広いので、子どもたちを支援できる基幹のようなどころも含めて、検討の一つの材料にしてもらえればありがたいと思っている。

- 美山分校では、非常に生徒数が減っている。来年度入学生は8名である。70%以上の生徒が何らかの支援を要し、特別支援学校と異なり、一般の教員で一生懸命やっているという状態だ。施設等にも恵まれていないが、地域の中学校の先生方の願いに応えるために、教職員は一生懸命で、生徒も非常に生き生きと活躍してくれている。生徒数が少なく、特別活動は実際には陸上競技部ぐらいしかできていない現状である。
- 学校の規模が少なくなると教育課程上の問題等が出てくるとの意見があったが、本校はぎりぎりやれているという状況だ。特別な加配制度もあり、何らかの方法で授業等については手厚く指導できている。ただし、地元の美山中学校、周山中学校と同じで、部活動は非常にこれから大変である。地元の両中学校でも部の数が教職員の数より多くなってしまい、一部の部を整理されている。本校についても次年度から団体競技が動かなくなってしまう。サッカー部は、今は十数名だが、新3年生が引退した場合、新入生がなければ試合に出られず、フットサルに出ざるを得ないのではないかと心配している。すでに他の団体競技でも、女子のバスケットボールは3名で頑張っており、須知高校との合同チームで出場している。また、ソフトテニス部も3名で、学校の活性化は危惧されているところである。
- 園部高校はかつて地域から非常にお叱りを受けていた厳しい時代があった。地域の方々に信頼される学校を、と諸先輩方が色々と努力し、今の園部高校を創ってきた。少しずつ地元の方の信頼は回復できつつあると思うが、実際には定員を割っているので、まだまだ努力が足りないと思い努力しているところである。  
京都市内等と比べ、本当に小中高の連携ができてい学校だと思っている。高等学校で定員を割ると、本来なら受検生徒全員合格となり、入学後の対応に非常に苦慮することがあるが、地元中学校がしっかりと進路指導していただいているので大変ありがたいと思っている。それぞれの高等学校も決して生徒を奪い合うのではなく、各校で連携をとりながら、それぞれ特色を出しながら頑張っている。
- 最大の問題は子どもがいないということ。その中で何らかの判断を今後していかなければならないと思う。子どもが少なくなると、学校の活性化や、選択科目、部活動の問題が生じる。生徒間で大きな学力差がある中で、それぞれの力をつけさせることに各校の教職員が一生懸命やっているが、限界もある。どこかで見極める時期があると思っている。子どもがいればこんなに素晴らしい地域はない。望んでも難しいことだが、その中で何とか良い着地点を見つけられればと思っているところである。
- ◇ 今後については、個別に検討すべき事項を整理し、それを踏まえてどう進めていくかについて、次回の懇話会のことも含め、おって出席の皆様にお知らせしたいと考えている。それでは、これにて懇話会を終了する。